

そして、そのついでに、ワカサギは湖辺の冷たいすき間風の吹き込む番小屋で、煤けたストーブの天板の上で焼いたあつあつのを生醤油で食べるのが一番、などと話したりもした。

ワカサギといえば昨年2月に研究室で山中湖へ穴釣りに出かけたことを思い出す。年の始めに、何かの話からワカサギ釣りの話になり、山中湖畔に大学の寮もあることとて、早速実行に移したというわけである。標本採集を兼ねて、2月初めのすばらしく天気の良い土曜日に、都合のついた総勢9名が、フライ鍋、七輪、木炭等々を積みこんだ車に分乗して、白銀に光る富士を目標に一路西に向かった。

ワカサギの穴釣りは厚くはった氷にまず穴を開けることから始まる。風を避けるためにはそり付きの木製の小屋を借りる。小屋の床には長方形の穴があいていて氷の穴にあわせて釣り糸を垂れるのである。小屋は2人が向いあってしゃがめる程度の大きさで、引き戸を閉めると光は床の穴からしか入って来ない。小屋には炭火を持込んで暖がとれる。

この日の氷の厚さは約20cm。ワカサギは繊細な女性的な感じの魚である。それが時には5本の釣り針全部に一尾ずつつかまって、冷たくよどんだ水の底から白く揺れながら上って来る様子は、大げさにいうと夢幻的ともいえる美しさであった。

釣れた魚はそのまゝ氷の上に出しておくと、すぐに凍って氷にくっついてしまう。最も原始的な冷凍保存法である。

富士山が目の前に大きく姿を見せているだけに気温も低く、釣り糸にも小さな氷の玉がじゅずつなぎにつくし、氷の穴にも次々に新しい氷ができて来る。

寒さといえば、次の日の早朝5時の朝釣りに涉る連中をかり出そうとした時の寮の入口の寒暖計は-20℃に近かった。おそい朝食にガリガリに凍った漬け物がついたことも良い経験であって、このワカサギの穴釣りを研究室の年中行事の一つにしようかなどと話したものである。

とはいうものの、厳しい寒さにこりたためか、今年はまだ誰の口からもその話は出ない。

(1978・1・15記)

ニュージーランドの旅

吉川虎雄

2ヶ月あまりのニュージーランド旅行から帰国した直後に原稿の執筆を依頼されたので、今度の旅行の間に感じたことを書いてみようという気になった。

私にとっては3度目のニュージーランド訪問であったが、主として都市に滞在した前2回の旅とはちがって、今回はその大半を僻地ですごしたので、多くの新しい知見がえられた。旅行の目的は第四紀地殻変動の調査で、いさゝかいかめしく聞えるが、要は海成段丘を調査して、第四紀地殻変動に関する日本との比較研究の資料をうることにある。調査地域は人口の少ないニュージーランドの中でも比較的人口の稀薄な北島北東部と南島北東岸で、前者はマオリ族の人口が白人のそれをしのぐ特異な地域でもある。

人口の少ない地方で地形調査をする場合には、ふつう土地の人々との接触は少ないものであるが、この国では必ずしもそういうわけにはいかない。開拓が始められてから150年もたさない間に、海岸から山の頂まで緑の牧野にかえられ、私たちの調査範囲には土地所有を示す柵が至るところに張りめぐらされているので、立入り許可を求めるために、否応なしに土地の人々との接触をはからなければならぬ。海岸にそって100ヘクタール以上の土地を所有している農家も少なくないから、こんなところで立入りを拒否されたら、調査地域に大穴があき、お手上げである。色々ないきさつはあっても、たいてい気持よく立入りを認めてくれたが、私にとってはこれまでになく土地の人々とふれあう機会の多い旅行になった。しかし、それを除けば、歩いていて出会うのは羊か牛だけといってもよい位であるから、まことにのんびりした旅を楽しむことができる。さんさんたる陽光、美しい緑の牧野、のどかに草をはむ家畜の群、そして林にかこまれた豪壮な農家。それは南海の楽園とよぶにふさわしい風景である。

しかし、所有地への立入り交渉のさ中に、日本への牛肉輸出問題や日本漁船の近海操業などが時として話題になり、この国が直面している現実を考えさせられることが少なくなかった。かつての母国イギリスのEC加盟以後、この国の貿易には大きな変化が生じ、その相手国として日本が浮び上ってきた。訪問するたびに激増している日本製自動車からも知られるように、対日貿易は入超であり、200カイリ水域での漁業をテコに、日本に牛肉の輸入を迫っている。世界でも高位にあった1人当たり国民所得が昨今では相対的に下落の途をたどっているのも、畜産品を輸出の柱とし、工業製品の大半を輸入に頼ってきたこの国の宿命であろう。あくまで畜産国として止まり南海の楽園を守るか、工業化によって低落する国の経済を維持するか、今や国論は二つに分れているようである。しかし、人口わずかに300万余のこの国では、労働力・資本の不足、国内市場の狭さなど、工業化への途もきびしい。また、ポリネシアからの労働者の流入によって、オークランドなどの都市社会にはすでに変化があらわれ始めているという。喧燥と公害の国から訪れた私には、この南海の楽園を工業化の煙につまむことには忍びがたいものがある。平均化した高い生活水準を維持してゆくために、この国が世界経済の波の中で進路の選択に苦慮している姿の一端を、今度の旅で窺い知ることができた。

平等と同権って？

木本佳子

現在の私のプロフィールご報告から。婦人総合雑誌(未婚の人向きの)の大番頭、いえ城代家老。作る身も未婚。47才。ガミガミうるさい会社勤めの83才親父と、自称現役76才老母宅の居候(これはイソローと読むのデス)。

28年3月に教室の一回生として卒業してから環境だけは不変ですので、年令と仕事だけは、まあベテランということになりましょう。怠け者、心身虚弱、あたま半人前。取り得一つもなしの札つき学生でしたから、先生がたはお荷物としてご記憶でしょうし、級友がたはチームワークを乱す半端人足だったとの印象をお持ちだと思いのです。事実、くる日もくる日も教室とは無関係の本に熱中し、